

令和6年度

群馬大学地域貢献事業 報告書

地域と共に歩む大学を目指して



群馬大学
GUNMA UNIVERSITY

地域と共に歩む大学を目指して

国立大学法人群馬大学は、教育・研究活動とともに、地域貢献にも力をいれています。コミュニティの一員として、地域と共に歩む大学を目指し、地域貢献活動に組織的に取り組んでいます。

活動内容は、人材育成、地域課題、住民サービス、医療・保健・福祉、産学官連携、文化交流、小中学生に対する理科体験教室など、多方面にわたっています。各種イベントや公開講座などを通して、本学の教育研究の成果を社会に還元し、地域住民の幅広いニーズに応えるとともに、地元群馬の発展のために努力しています。

本学の地域貢献活動は、学長のリーダーシップのもと、地域連携推進室を中核として、学内外の各組織や教員個人などと連携し、事業を実施しています。学長裁量経費の中から社会貢献事業経費を措置して、学内でテーマを公募し審査の上、優秀な事業に対して助成しています。本報告書は、こども体験教室「群馬ちびっこ大学」、公開講座及び地域貢献事業について、地域の皆様に紹介します。

また、本報告書には掲載しておりませんが、各学部等においても多数の地域貢献活動を実施していることを付記します。

地域連携推進室長

地域連携推進室主催地域貢献事業

事業名	担当学部等	担当学科等名	担当者	掲載ページ
こども体験教室「群馬ちびっこ大学」	全学部等	地域連携推進室 他	花屋 実 理事	2
公開講座	各学部等	地域連携推進室 他	花屋 実 理事 各実施責任教員	4
群馬県の自然環境と特産を生かした健康増進講習	医学系研究科 医学部附属病院	麻酔神経科学分野 集中治療部	齋藤 繁 教授	5
ゲノム医療の地域社会実装に資するゲノム科学教育のための教材開発	医学系研究科 共同教育学部	教育研究支援センター	大日方 英 准教授	7
救急救命士向けの病院前周産期救急対応講習の開催	医学系研究科 医学部附属病院	産科婦人科 小児科 周産母子センター 救急科	田中亜由子 医員	9
Hair For Children 髪を失った子供たちへ届けるやさしいヘアウィッグプロジェクト	医学系研究科 医学部附属病院	総合外科学講座	大竹紗弥香 助教	11
群馬県小児内分泌代謝疾患対策推進会議の持続的な発展（小児内分泌代謝疾患の啓蒙と病診連携の推進による子どもの健康増進）	医学系研究科 医学部附属病院	小児科学分野	大津 義晃 助教	13
群大生が受け継ぐ天明3年の浅間山大噴火と復興支援	保健学研究科	看護学	内田 陽子 教授 辻村 弘美 准教授	15
ゲノム医療に向けた群馬県遺伝子診療体制の構築(群馬県ゲノム医療対策会議の設立と活用)	医学系研究科 保健学研究科 医学部附属病院		小澤 厚志 教授	17
保健学学生・修了生主体による地域住民と協働した健康づくりの活動拠点形成	保健学研究科	地域保健推進室	佐藤 由美 教授 他	19
群馬県軟式野球選手を対象にした成長期スポーツ障害検診 群馬県高校野球投手メディカルチェック	医学系研究科 保健学研究科 医学部附属病院	整形外科科学分野 リハビリテーション学 整形外科	田鹿 毅 教授	21
北関東精神保健看護研究会	保健学研究科	精神看護学	近藤 浩子 教授 八木原ひなた 助教	24
こども科学体験教室ハイブリッド～チョコレートを科学する～	理工学部	分子科学部門 知能機械創製部門	奥津 哲夫 教授 鈴木 良祐 准教授	26
'24 summer オープンラボ student programme	生体調節研究所		佐々木伸雄 教授	28
高校生のための最先端生命科学&重粒子線医学セミナー	生体調節研究所 重粒子線医学研究センター		佐々木伸雄 教授 大野 達也 センター長	30
ウクライナ DAY in 群馬大学	総合情報メディアセンター グローバルイニシアチブセンター		西村 淑子 センター長 飯島 睦美 センター長	32

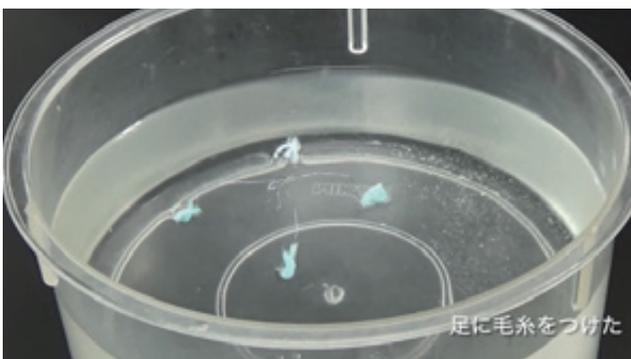
8. 群馬ちびっこ大学 実施風景



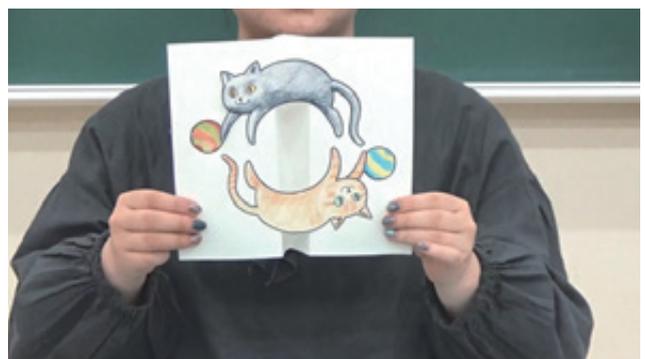
ひたひたじゃぶじゃぶ☆かんたん染色



一瞬で凍るシャーベット作り



アメンボもけいを浮かせてみよう



重ねて動かす。紙工作！



群大で『疾走中』！



結晶を育てる

公開講座

Aコース「一般市民」対象

講座名	期間	学部等	実施責任者
オンライン授業で学ぶ手話とろう文化	9日間	共同教育学部	金澤 貴之・教授
オンデマンド教材で学ぶ手話とろう文化	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
企業・産業分析スキル特論(金融ビジネスの基礎から実際まで)	9日間	情報学部	杉山 学・教授
社会起業家特論(社会起業家特論Ⅰ・Ⅱ)	9日間	情報学部	杉山 学・教授
エイジングとアンチエイジング	2日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
糖と脂肪の代謝	2日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
食事と腸内細菌	2日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
運動の生体調節作用	1日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
生物統計とデータ解析	6日間	食健康科学教育 研究センター	粕谷 健一・教授
チョコレートのおいさを科学する -実験して確かめるテンパリング-	1日間	理工学府	奥津 哲夫・教授
国際協力、はじめの一步!	1日間	保健学研究科	辻村 弘美・准教授
健康保険の過去・現在・未来	1日間	医学系研究科	森 禎徳・講師
アンケートの作り方入門	1日間	大学教育・ 学生支援機構	二宮 祐・准教授
PFASヒト健康への新たな影響～どこまで分かったか～	1日間	医学系研究科	鯉淵 典之・教授
第31回アレルギー週間事業 アレルギーの講演会・相談会	1日間	保健学研究科	久田 剛志・教授
「地域における日本語支援」入門講座	5日間	グローバルイニシ アチブセンター	牧原 功・准教授
ここでしか聞けない医学・科学のあれこれ	4日間	生体調節研究所	佐藤 隆史・准教授

Bコース「専門技術者」対象

講座名	期間	学部等	実施責任者
日本手話の文法を学ぶ(1)(2)	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
聴覚障害児の理解	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
聴覚障害児の教育課程・指導法	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
ろう重複障害児・者の教育と支援	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
手話通訳者のための障害者福祉論	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
手話通訳者のためのソーシャルワーク論	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
遠隔時代の手話通訳	—	共同教育学部	金澤 貴之・教授
高校生サイエンスインストラクター育成プログラム①②	4日間	理工学府	佐伯 俊彦・助教

医学系研究科・医学部附属病院

群馬県の自然環境と特産を生かした健康増進講習

担当学科等 麻酔神経科学分野・集中治療部

担当者 齋藤 繁 教授

●事業概要

群馬大学は「食健康科学」の拠点となるべく準備を進めている。こうした中、健康管理に関する最新知識が集積している大学附属病院のスタッフが県民に対して栄養管理と運動の適切な管理が健康増進のために必須であることを解説することは大きな社会貢献になると考えられる。前年度は「医食同源・薬食同源」という切り口で類似の活動を行なったが、令和6年度は地域の食材と地形的特性を活かした運動の合理的な組み合わせが、ストレスの多い社会において「癒し」効果を持ち、健全な心身を維持するために必須であることを新聞紙面や講習会等を通じて啓発した。

地元新聞での月1回の定期的紙面解説と並行した集合型研修会を群馬県庁で開催した。集合型研修会では健康増進に寄与すると考えられる食材を使った料理もデモンストレーションした。屋外活動での事故対応に関する講習会も医療関係者を対象として開催した。群馬県の環境を生かした健康増進活動の推奨という目的は概ね達成されたと考えられる。

●実施事業等

群馬県の自然環境を生かした健康増進講習会活動を地元スポーツ団体等と共同で継続的に実施してきたが、本年の事業では新聞媒体と公共施設での講演を中心に広い啓蒙活動を実施した。2024年度も前年に引き続き地元の上毛新聞社が全購読者に配布するJOMOTTOにおいて「誌上健康登山塾」を掲載し、次年度も本紙面での掲載を継続する予定である。また、上毛新聞社と共同して、群馬県庁ビル31階のイベントスペースGINGHAMでも対面の講演会活動を行なった。群馬県健康長寿社会づくり推進課とは、群馬県が運営する運動推奨アプリのバーチャルウォーキング画面作りで協働しているが、当該WEB媒体による啓蒙活動も継続している。インフルエンザならびに新型コロナウイルス感染症が収束に向かいつつあった2025年2月11日には群馬県消防学校において、群馬県防災航空隊の協力を得て、ヘリコプター実機も使用した災害時の救護講習会も行なった。こうした活動は、「知」の拠点である大学から地元住民への社会貢献活動として意義深いものと考えている。

●本事業の成果

群馬県の山間地域では少子高齢化が進んでいるが、当該地域に居住する中高年者がそれぞれの運動習慣を確立し、健康増進活動に継続的に取り組むことが重要である。また、平野部の居住者にとっても山間部の坂道を活用した健康増進活動は生活習慣病予防に有効である。こうした活動は継続性が重要であり、数年に渡る繰り返しの活動で理解者の増加を図っている。

申請者は群馬県の自然環境を生かした健康増進講習会を地元団体等と継続的に開催してきた。そうした活動を通じて、山々に囲まれた群馬県において自然環境を生かした効果的な健康増進法を「知」の拠点である大学が住民に提案することの意義は大きいと感じている。また、昨今は身体活動と喫食の管理を医学・保健学の科学的根拠に基づいて行うことの重要性が高まっている。屋外活動での身体的障害防止、ならびに健康被害発生時の適切な救護活動を実践できる屋外活動補助者を養成することの地域貢献度も高い。本事業を発展的に継続させ、地域と大学の信頼関係を強固にすることで、大学の地域貢献を今後も推進したい。

● 実施風景



医学系研究科・共同教育学部

ゲノム医療の地域社会実装に資するゲノム科学教育のための教材開発

担当学科等 教育研究支援センター
担当者 大日方 英 准教授

●事業概要

ゲノム情報に基づいて個々人に最適化された予防・診断・治療を行うことを「ゲノム医療」と呼ぶ。

「ゲノム医療推進法」が2023年6月に成立し、ゲノム医療の社会実装に向けた動きが加速している。ゲノム医療が社会に広く普及するためには、地域住民のゲノムに対する理解の増進が不可欠であるが、現在、分かりやすいゲノム科学教材は不足しており、医療従事者もゲノム医療に関する教育を受けてこなかった場合が多い。

本事業では、ゲノム科学教育のための実習教材の開発を島津理化社とともにを行い、出前授業や市民公開講座、遺伝子診療部受診患者への説明等に活用することで、ゲノム医療の地域社会への普及に貢献する。昨年度から支援を受けてスタートした本事業では、2つの試作品の製作と附属中学校および本学教養教育科目での授業実践における試用へと至り、参加した学生の評価が非常に高かった。本年度は更なる授業実践を通して、製品化に向けた取り組みを継続する。

●実施事業等

島津理化社と開発する実習教材のコンセプトについて討議を行った上で、以下の2つの実習教材開発に着手した。

1. ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材
2. ゲノムのサイズ（長さ）を体感できる実習教材

コンセプトシートに基づき実習教材の試作品をそれぞれ作成した。試作品は2024年11月29日の本学講義「生命科学特論C」（共同教育学部分野専門科目理科分野2年次）および2025年2月4日の群馬大学共同教育学部附属中学校における授業実践（中学3年生対象）において使用し、学生のゲノムに対する理解向上に活用するとともに、製品化に向けた改良課題の抽出を行った。また、2024年6月9日に開催された群馬県ゲノム医療対策会議県民公開講座（資料1）および2024年11月21日に開催された第19回東和新生会ビジネス交流会（資料2）において、群馬大学におけるゲノム教育の取り組みについて発表を行った。

●本事業の成果

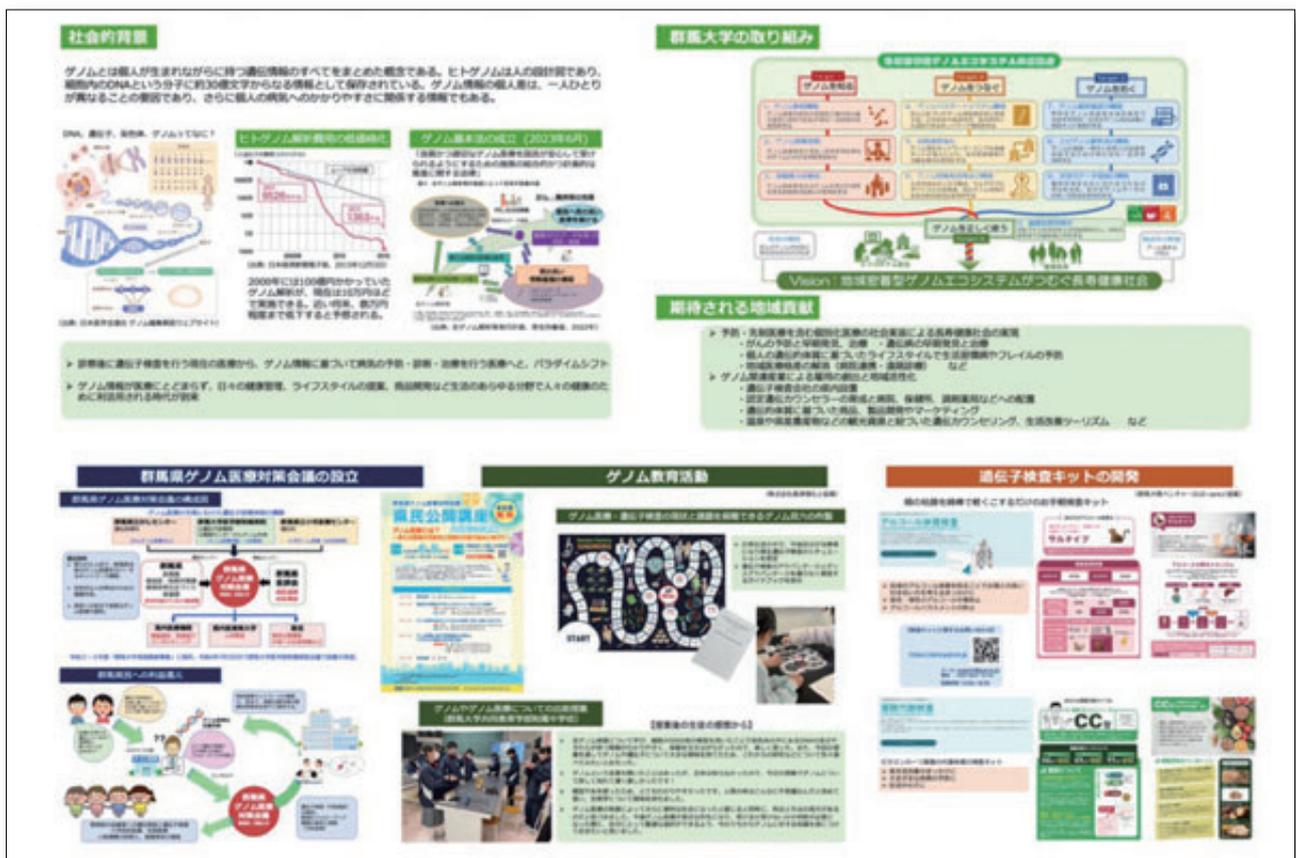
本事業期間内に2つの教材の試作品作成と授業実践へと至った。

1. 2024年11月29日共同教育学部分野専門科目理科分野「生命科学特論C」（大学2年生）
「ゲノム医療・遺伝子検査の現状と課題を俯瞰できる教材」の活用受講した学生からは「ゲノム医療の現状と課題について分かりやすくまとめられている」との声があった。
2. 2025年2月4日群馬大学共同教育学部附属中学校における授業実践（中学3年生対象）
「ゲノムのサイズを体感できる実習教材」の活用受講した学生からは「模型や糸を使ったため、とてもわかりやすかった」、「生物学、人間の細胞について興味をもった」等の声が聞かれた。いずれも学生の理解向上や興味喚起に有効であったと考えられ、協議の結果、ゲノムサイズ教材を製品化することが決定し、現在島津理化社において製品のプロトタイプを製作中である。

●実施風景



資料1 群馬県ゲノム医療対策会議県民公開講座における取組紹介（口頭発表）



資料2 第19回東和新生会ビジネス交流会における取組紹介（ポスター発表）

医学系研究科・医学部附属病院

救急救命士向けの病院前周産期救急対応講習の開催

担当学科等 産科婦人科、小児科、周産母子センター、救急科
担当者 田中 亜由子 医員

●事業概要

昨今、群馬県を含む地方では未受診妊婦の増加や分娩施設の減少に伴い、病院前で出生するケースが増加してきている。病院外での分娩に遭遇した際に、最初に接触するのは救急救命士、救急隊員であり、2人の傷病者に対し迅速且つ適切な対応を求められる。隊員が分娩介助技術および新生児蘇生法を身につけていることによって母児をより良い状態で病院に搬送することができる。しかし、実際には他疾患と比較して事例が少なく経験も少ないために、不安の中で活動している隊員が殆どである。

そこで我々は、群馬県内の母体・新生児救急体制の充実に向けて、救急救命士に病院前周産期救急対応・新生児蘇生法を取得してもらうこと、医療機関と救急隊員との関係構築を図り、円滑な救急搬送を行えることを目的とした、病院前周産期救急勉強会を令和4年に策定し、群馬大学地域貢献事業として初めて開催した。本年は第3回目の開催である。この事業を群馬大学が継続的に行うことによって、群馬県の周産期医療がより良いものとなり群馬県民の利益につながる。群馬大学が群馬県・群馬県民に対して担うべき役割と考える。

●実施事業等

本勉強会を2025年1月25日、26日に開催することを決定し、群馬県内消防局・消防本部に、群馬県版病院前周産期救急勉強会を文書で通知し、計28名の受講希望があり採用した。

受講生は勉強会を受けるに先立ち、周産期領域の基礎知識をE-learningを用いて学習した。事前学習の最後に確認テストで満点を取ることをもって終了とし、一定の理解度に到達したことを確認した。

当日は体調不良で計2名の欠席があり、1月25日は14名、1月26日は12名の参加となった。講師は産婦人科医師だけでなく、小児科・救急科医師、コメディカル、救急救命士と多職種であり、様々な視点からの指導、意見を得ることができた。

勉強会では、まず群馬県の周産期・救急事情の現状に関する講義の後、群馬県で実際にあった症例を元に2種類の机上訓練（救急要請訓練と搬送決定訓練）を行った。救急要請訓練では、救急要請が入った際、少ない情報から妊婦を想定し、適切な準備ができることを目的とし、搬送決定訓練では、妊産婦の緊急状況を判断し、群馬県の周産期事情を加味した適切な搬送先を選定できることを目的とした。また、シミュレーターを使用して分娩介助や肩甲難産、大量出血時の対応を取得し、午後は日本周産期新生児学会が行っている、新生児蘇生法講習会を行った。最後に車内での分娩介助の困難さを学ぶため、ドクターカーを使用した分娩シナリオのシミュレーションを行った。

●本事業の成果

周産期事案は他疾患に比べ症例数が圧倒的に少ないが、年々救急隊が対応する事案が少しずつ増加している。実際、受講生の周産期事案経験率も増加していた。これまでの周産期事案では不安が強いと感じていた者が多かったが、勉強会を通し病院前産婦人科救急に関しての知識・対応するスキルを習得し多くの不安が解消されたことを、終了後のアンケートより確認した。

基本数名で活動する隊員において、周産期事案はいかに隊での情報共有が重要で、人手が必要か、そのためには、隊の皆が周産期事案への対応を知識、技術として習得することが重要となってくる。受講生からは、部署内への啓蒙を行っていくという声や、継続しての参加希望も多数寄せられ、勉強会の成果を実感した。

周産期事案は対応に難渋するものもあり、救急隊が実際に経験した病院前周産期救急事案を共有できる体制を作ること、救急隊が自信を持って活動していくために、また県内の病院前周産期救急の拡充には重要である。全国でも病院前周産期救急事案の症例を蓄積している地域は少なく、その意義は高いと考える。今後も勉強会を継続し、多くの救急救命士・消防職員に受講してもらうことにより、群馬県全域で病院前周産期救急を安全に行える環境を整えていきたい。

広報活動として、群馬大学医学部附属病院産科婦人科学教室のHPに今回の開催についての報告を掲載した。

● 実施風景



医学系研究科・医学部附属病院

Hair For Children 髪を失った子供たちへ届けるやさしいヘアウィッグプロジェクト

担当学科等 総合外科学講座

担当者 大竹 紗弥香 助教

●事業概要

「Hair For Children」プロジェクトは、小児がんや脱毛症、抜毛症などで髪を失った子どもたちに、高品質な医療用ウィッグを無償で提供する活動です。この取り組みは、2017年に「女子高生ヘアドネーション同好会」として始まり、2024年度に群馬大学医学部で新たに発足しました。全国からヘアドネーション（31cm以上の髪の寄付）を募り、大学内で保管・仕分けを行った後、株式会社アートネイチャーと連携してウィッグを作成します。完成したウィッグは、主に小児病棟に入院・通院する子どもたちに届けられます。本プロジェクトの目的は、髪を失った子どもたちへヘアウィッグをお届けすることに加え、ヘアドネーション文化を広め、共感と支援の輪を広げることです。

●実施事業等

①ヘアドネーションの受け入れ・保管

群馬大学内に「ヘアドネーション受け入れ拠点」を設置し、全国から寄付された髪を受け付け。
髪の寄付方法（長さ31cm以上、乾燥後にジップロックで保管）を周知し、適切な受け入れ体制を構築。

②仕分け・管理作業

教職員・学生の有志によるボランティア活動として、寄付された髪を分類し、品質管理を実施。
仕分け作業を「交流サロン」と位置づけ、学内の異なる部門間の連携を強化。

③ウィッグの作成と提供

株式会社アートネイチャーをはじめとする連携企業と協力し、医療用ウィッグを製作。作成したウィッグを、小児病棟や関連医療機関を通じて、必要とする子どもたちに無償提供。

④啓発・広報活動

ウェブサイトやSNSを活用し、ヘアドネーション事業「Hair For Children」の認知度向上を図る。
地域イベントを開催し、ヘアドネーション活動の意義を発信。
透明性・トレーサビリティを確保し、寄付者に対するフィードバック体制を整備。

●本事業の成果

当初、医学部内に髪の保管および仕分け作業のスペースを確保する計画でしたが、調整の結果、学内への設置は不可であったため、前橋市千代田町の外部施設にスペースを設置しました。これにより、継続的な活動の基盤を確保し、教職員・学生の有志によるボランティアが仕分け作業に携わることのできる環境を整えることができました。

また、ヘアドネーションの認知を広めるために、ウェブサイト・公式Instagramを開設し、広報活動を強化しました。さらに、「Hair For Children」プロジェクト説明会を実施し、本企画の意義とプロジェクトの取り組みを賛同者へ直接伝える機会を設けました。

【ウェブサイト】

<https://surgery.med.gunma-u.ac.jp/npo/hair-for-children/>

【Instagram】

https://www.instagram.com/gunma_u_hfc/?igsh=MWppdnNpa2d4YjB0Mg%3D%3D&utm_source=qr#

髪の寄付を全国から募りましたが、初年度ではフルウィッグを作成するための十分な量を集めることができませんでした。しかし、県内の小学生から提供された髪を活用し、前髪ウィッグを作成して病棟へ届けることができました。小児から小児への柔らかい髪の提供により、質の高いウィッグを生み出すことができました。

さらに、「現在は髪を伸ばしている途中だが、31センチを超えたらぜひ寄付したい」という声が多数寄せられ、ヘアドネーションの活動が徐々に浸透していることを実感しました。

● 実施風景

群馬大学
「Hair For Children」
プロジェクト

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

1

小児がん等で髪を失った子供たちへ
やさしいヘアウィッグを届ける
「Hair For Children」

- ・プロジェクト名: Hair For Children
- ・実施機関: 群馬大学医学系研究科 (外科)
- ・採択事業: 令和6年度 群馬大学地域貢献事業
- ・目的: 小児がんや脱毛症で髪を失った子供たちにヘアウィッグを届ける

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

2

2024年度、群馬大学医学部で発足した「Hair for Children in Gunma」の活動の原点は、2017年にぐんま国際アカデミーの生徒たちによる「女子高生ヘアドネーション同好会」として始まりました。

この活動は、現在、横浜市立大学で「Hair for Children」としてリニューアルされ、多くの共感を得ながら継続しています。私たち「Hair for Children in Gunma」も、「女子高生ヘアドネーション同好会」の志を大切に引き継ぎ、より多くの子どもたちを支えるために新たな一歩を踏み出しました。

頭髪は当たり前にあるものと思いがちですが、日本には小児がんや脱毛症、抜毛症といった病気の治療によって、髪のお悩みを抱える子どもたちがたくさんいます。そんな子どもたちに少しでも明るい未来を届けたい、その想いから、この活動は始まりました。そして今も変わらず、その想いを胸に、私たちは活動を続けています。

この取り組みは、全国各地から髪を寄付して下さるドナーの皆さま、そして応援して下さる皆さまのお力添えがあって初めて実現しています。それぞれのドナーの方が託してくださる大切な髪には、特別な想いが込められています。私たちは、その髪だけでなく、思いまでも丁寧にウィッグへと紡ぎ、必要としている子どもたちへお届けすることを何よりも大切にしています。

小児がんの治療などで頭髪を失い、悩む子ども達がたくさんいます。ウィッグの提供活動を通して、子供たちに笑顔をお届けたい！ヘアドネーション活動に対する人々の理解・協力を得ることで、人々が互いに尊重し、支え合い、誰もが生き生きとした人生を送ることができる、やさしい社会の実現を目指しています。

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

3

・ Hair for Children in Gunma プロジェクトの詳細

・ 活動の目的

- ・ 小児がんや脱毛症で髪を失った子どもたちに、提携関連企業の協力でウィッグを提供する
- ・ 全国から寄付された髪を使って、医療用ウィッグを作成、小児病棟へ無償でお届け

・ 寄付の流れ

- ・ 髪の長さを31cm以上にカット
- ・ 髪を乾燥させ、ジップロックに入れて送付
- ・ ヘアドネーションシートを記入
- ・ 寄付後、オンラインでお礼のお手紙が届く

・ 支援の輪を広げる

- ・ ヘアドネーション活動への理解と協力を呼びかけ
- ・ 人々が支え合い、誰もが生き生きとした社会の実現を目指す

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

4

ウェブサイト・公式Instagram開設

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

5

県内の小学生より提供された頭髪 2025/2月

提供された頭髪で作成されたウィッグ

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

6

提供された頭髪で作成されたウィッグ → 小児病棟へお届けします

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

7

髪を提供した小学生からの手紙 2025年2月

わたしは、ヘアドネーションのことお母さんから聞きました。最初はどんなものかわからなかったけど、自分の髪が誰かのためになるなら、やってみたくて思いました。

でも、2年くらい伸びて、長くなって乾かすのが大変だったし、ときどき「もう切っちゃおうかな」と思うこともありました。

それでも、がんばって伸ばし続けました。気づいたら、とても長くなっていました。

それで、髪を寄付しました。

あとで、できあがったウィッグの写真を見ました。わたしの髪のワセがちゃんと残っていました。これ、本当にわたしの髪だ！と思いました。

ヘアドネーションは、どういものがわかりませんでした。初めて自分の髪がウィッグになって、誰かに使ってもらえると知って、実際に見て感動しました。とても嬉しかったです。やってよかったと思います。

だから、今また髪を伸ばしています。また、ヘアドネーションをしたいです。

2025年2月開催 Hair for Children 説明会
その翌日にカットした頭髪の寄贈がありました。

Hair for Children in Gunma (髪を失った子供たちへウィッグを届けるプロジェクト)

8

医学系研究科・医学部附属病院

群馬県小児内分泌代謝疾患対策推進会議の持続的な発展 (小児内分泌代謝疾患の啓蒙と病診連携の推進による子どもの健康増進)

担当学科等 小児科学分野

担当者 大津 義晃 助教

●事業概要

目的：群馬県の子どもがいつでも適切な医療を受けられ、子どもの健康が増進されるようにすること

内容：①感染症蔓延時や災害時の小児内分泌代謝疾患の診療連携体制を維持すること

②希少疾患である小児内分泌代謝疾患を群馬県民やかかりつけ医へ周知啓蒙すること

③新生児スクリーニング該当疾患を周知啓蒙すること

概要：令和3年度ならびに4年度の本事業において群馬県小児内分泌代謝疾患対策推進会議を設立し、①小児内分泌代謝疾患の診療連携会議、②ぐんま子ども・子育てコロキウム（市民公開講座）、③群馬小児糖尿病の会（患者会）の医療支援、④新生児オプショナルスクリーニングの体制検討を実施してきた。今年度のポイントは、子どもが1日の大半を過ごす学校関係者への啓蒙は、疾患マネジメント改善にも繋がることから、学校関係者への啓蒙活動に注力することとした。

●実施事業等

- 1. 小児内分泌代謝疾患の診療連携会議：**県内で小児内分泌代謝疾患を診療する医師や医師会と繋がり、感染症蔓延下や災害時における診療機能維持体制の構築と維持を行った（参加病院：伊勢崎市民病院（県央）、高崎総合医療センター（西毛）、利根中央病院（北毛）、桐生厚生総合病院（東毛）、これらの病院と本学とで、県内の小児内分泌代謝疾患罹患児のおよそ9割を診療している。実施日：5月10日、6月7日、7月5日、9月20日）。また、医師と学校関係者向け教材の作成を行った。「改訂版 学校医・かかりつけ医向けの高度肥満児対策の手引き」（来年度に群馬県医師会・群馬県教育委員会より発行予定）
- 2. 市民公開講座：**従来の「ぐんま子ども・子育てコロキウム」の開催には至らなかったが、医学生とともに群馬小児糖尿病の会（患者会）や群馬糖尿病協会のイベントを通じて、患者とその家族だけでなく、一般市民や学校関係者への疾患啓蒙を推進させた。また、群馬県教育委員会とともに健康教育実践講座を実施し、学校関係者凡そ300名に対し、小児1型糖尿病の講演を行なった。（8月1日「すべての先生方にご理解いただきたい1型糖尿病とその支援」）
- 3. 群馬小児糖尿病の会（患者会）の支援：**医学部生も参画して群馬小児糖尿病の会（ひまわり会）の医療支援を行なった。日本糖尿病協会生活指導講習会（糖尿病サマーキャンプ、8月8-10日開催、参加者数約100名、患者とその家族8割、医療従事者1割、学校関係者1割）の準備や運営（患者会と学生ボランティアの準備教育や、イベントの医療的支援など）のほか、12月15日に刀城会館で調理実習と喫食を通じて、血糖コントロールについての教育を行った（クリスマス会、参加者数約40名、患者とその家族8割、医療従事者2割）。
- 4. 新生児オプショナルスクリーニングの支援：**今年度から日本国内の新生児スクリーニング体制が大きく変化したが、いずれも希少疾患であるため、県行政や群馬県健康づくり財団とともにスクリーニングの啓蒙と普及をすすめた。とくに群馬県先天性代謝異常等検討会議を通じて、県行政への働きかけを続けた結果、群馬県は国内でも群を抜くスクリーニング体制を確立でき、令和7年度から実施できることになった。

●本事業の成果

- 1. 小児内分泌代謝疾患の診療連携会議：**県内の拠点病院間担当医との検討ができた。病院担当医間で代替診療継続の問題点とその対策について情報共有することができ、ひとつもしくは複数の病院が感染症蔓延や被災によって小児内分泌代謝疾患の診療機能が低下した場合、他の病院で代替診療を実施する協力体制が継続できた。また、医師と学校関係者向け教材の作成により、県内の子どもがいつでも適切な医療を受けられることに繋がると思われる。
- 2. 市民公開講座：**多くの患者やその家族、学校関係者、さらに医療従事者も参加するイベントを通じて、小児内分泌代謝疾患の啓蒙をすすめることができた。
- 3. 群馬小児糖尿病の会（患者会）の支援：**ピアサポートを促すことができた。また、調理実習による血糖コントロール勉強では、よりよい糖尿病治療に必要な問題点を医療従事者と患者、家族とで共有することができ、よりよい療養につなげることができた。主たる担当者である大津が、日本糖尿病協会「小児糖尿病功労賞」を受賞した。
- 4. 新生児オプショナルスクリーニングの支援：**今年度はじめから、県行政や群馬県健康づくり財団とともにスクリーニングの啓蒙と普及をすすめた。とくに、国内では多くの自治体が導入を見送っている7疾患のスクリーニングを、来年度から群馬県は実施することになり、陽性児の受け入れや実施体制作りに対して、全面的に協力した。これにより、群馬県は国内でも群を抜く新生児スクリーニング体制を確立でき、令和7年度から実施できることになった。

● 実施風景



クリスマス会



サマーキャンプ

担当学科等 看護学

担当者 内田 陽子 教授・辻村 弘美 准教授

● 事業概要

群馬県は災害が少ないという意識がある。しかし、群馬県内には5つの活火山を有する。1783年（天明3年）の浅間山大噴火では、泥流も発生、飢饉も関連し死者も多く出た。被害の大部分は群馬県で吾妻郡嬭恋村鎌原地区は村全体が土石なだれで埋まる。生存者は高台の観音堂に登った93名であった。その後、身分も超えて新しい家族形成、土地平等区分等を行った。これは世界にも類を見ない復興であり、現在まで現地の高齢者の方々が鎌原観音堂で語り部を担っている。しかし、コロナ禍もあり、語り部も少なくなり、受け継ぐ若者がいない状況にある。そこで、群馬大学生が次世代の語り部として立ちあがることとした。

群馬大学学部生・院生・教員が協働して、文献調査や現地の取材を重ね、WEB版（仮称「浅間山大噴火からの復興：頼もしい群大語り部さん」）に関する動画を作成して、群馬県内に配信する。動画であればいつでもどこでも語りを聞くことができ、次世代にも伝えることができる。

● 実施事業等

実施事業計画と実施状況は以下のとおりである。

1. 群馬大学医学部保健学科の掲示板で語り部募集。
2. 嬭恋郷土資料館や浅間山北麓ジオパーク推進協議会、鎌原観音堂奉仕会を含む地域住民、嬭恋村村長や教育委員会等に文書と共に協力を求めた。
3. 現地での対面取材、WEB取材を行う（インタビューや発掘調査現地視察等）また、取材時には写真や動画撮影を重ねた（宿泊及び日帰り取材）
4. 取材内容や文献等でパワーポイント及びポスター、鎌原かるた（災害と復興支援がわかる）作成を行う。
5. 4に基づいて動画5種類を作成するため編集作業及びナレーション挿入作業を行った。
6. 各動画のダイジェスト版をYou Tubeにして群馬大学内田陽子のホームページである <https://bpsd.jp>に先がけて掲載。
7. 作成した動画を次から次へと掲載追加した。
8. 2025年3月16日浅間山北麓ジオパーク主催のワークショップで成果を住民の前で発表。

● 本事業の成果

1. 群馬大学学部生と院生が現地に足を運び、地域住民と交流できた。
2. 取材をもとに住民がみてわかるポスターを作成して、実際に住民に広報できた。
3. 動画をYou Tubeに掲載のうえ、群馬県内だけでなく、県外にも配信できた。
<https://bpsd.jp/r6tiikikouken.html>
4. ワークショップで地元住民に以下の点を広報できた。
 - ①群馬大学が行う地域貢献事業
 - ②群馬大学医学部保健学科・看護学のめざすもの
 - ③文献や取材を通じて、群馬大学生・教員がまとめた天明3年の浅間山大噴火と復興支援についての特徴、文献研究や災害看護の視点などを踏まえた内容を住民に伝えることができた。
 - ④③について群馬大学生が語る動画を1つだけでなく5つ作成でき、一部（2024年にはダイジェスト版、動画1・動画5）を全国に配信できた（2025年3月末には残りの動画を配信予定）。
 - ⑤③についてワークショップで直接、地元住民に還元できた。
 - ⑥群馬大学生が災害看護についての理解を深めることができた。

令和6年度地域貢献事業
群大生が受け継ぐ
天明3年の浅間山大噴火と復興支援

群馬大学
SHIMANE UNIVERSITY

災害にまつわる先人たちの知恵を動画に！

発掘現場の見学
史跡のお参り
住民の方からの学び

必死の取材・編集
鎌原かるたも作成

群大生が現地の取材等で
動画を1-5を作成。(一部編集集中)
ぜひ、ご覧ください

群馬大学 ©内田陽子・辻村弘美
崎山恵里那・安倍おりえ・菅沼華海
駒井円香・川島花果

←R6地域貢献事業の動画はこちら

群馬大学内田陽子のHPIはこちら→

チラシ

ゲノム医療に向けた群馬県遺伝子診療体制の構築 (群馬県ゲノム医療対策会議の設立と活用)

担当者 小澤 厚志 教授

●事業概要

遺伝子の病的バリエーション（変異）による生活習慣病やがんなど疾病発症の機構が明らかとなってきた。これに伴い多くの遺伝学的検査は保険診療となり、また、がんパネル検査など複数の遺伝子を一度に検査するゲノム医療は既に一般医療として位置付けられる。一方で、疾患未発症者に対しての遺伝学的検査は原則的に保険外診療であり、遺伝医療の専門家による対応が望まれる。群馬県は、臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、遺伝看護専門看護師といった遺伝医療専門職が他県に比べて不足しており、限られた人材で、群馬県全体の遺伝医療、ゲノム医療をカバーするネットワークを構築する必要があることから、群馬大学医学部附属病院、県立がんセンター、県立小児医療センターの遺伝医療・ゲノム医療担当者、群馬県、群馬県医師会からの担当者によってメンバーを構成して群馬県ゲノム医療対策会議を設立し、運営する。

●実施事業等

これまでに遺伝医療・ゲノム医療の実務にあたる群馬大学医学部附属病院の臨床遺伝専門医、腫瘍センター医師・看護師、医学系研究科長、医事課事務担当者らと意見交換を行い、「群馬県ゲノム医療対策会議」の業務内容、設立に必要な要件などを検討した。また群馬県内の遺伝医療・ゲノム医療提供機関である県立がんセンター、県立小児医療センターの担当医師、群馬県医務課、感染症・疾病対策課、健康長寿社会づくり推進課担当者、群馬県医師会長との意見交換を行い、群馬大学医学部附属病院戦略作業部会にて会議設立の説明を行い、2022年7月に群馬県ゲノム医療対策会議の設置が正式に承認され、会議設置運営要領を作成した。また県内の各種医療系講演会にて会議設立の意義、本会議の業務内容、進捗状況につき講演を行った。2023年4月12日にゲノム医療対策会議発動にむけてのオンラインミーティングを開催した。2024年5月23日に群馬大学医学部附属病院にて対面にて第1回群馬県ゲノム医療対策会議を開催した。

●本事業の成果

令和4年度までに、群馬県の遺伝医療・ゲノム医療における問題点を、群馬大学学長に上申し、群馬県知事の山本一太氏に面会の機会を頂き、群馬県の問題点につきご説明し、会議設立を励行いただいた。最終的に群馬県より群馬大学医学部附属病院内に「群馬県ゲノム医療対策会議」を設置することを提言され、群馬大学医学部附属病院運営会議にて本会議の設置が正式に承認された。2023年4月の有識者によるミーティング、および2024年5月の第1回会議では、県内3施設での遺伝医療、ゲノム医療の現状報告と問題点が議論され、共通の問題点としてゲノム医療従事者の人材不足、県内各所との地域連携の円滑化の必要性、医療資源の問題などの課題が浮き彫りとなった。2023年12月の上毛新聞紙上にて、県ゲノム医療対策会議の設置と意義、目的につき紹介され、広く県民に周知されるに至った。また群馬大学医学部附属病院遺伝子診療部ホームページにて会議の公示を行なった。2024年6月9日に群馬県庁にてゲノム医療に関する県民公開講座を開催した。（「群馬県ゲノム医療対策会議県民公開講座における取組紹介」資料1参照）

群馬県ゲノム医療対策会議

県民公開講座

参加費 **無料**

ゲノム医療とは？ ハイブリッド開催

～新たな医療の可能性と地域での取り組みに向けて～

日時 2024年 **6月9日(日)**
14:00～16:00 (13:00開場)

会場 群馬県庁 28階 大会講場
(ハイブリッド開催)

[参加登録はこちら](#)

ゲノム医療とは。 一人一人で異なる遺伝子の特徴を調べ、その人の体質や病気の原因を考え、最適な治療を行う医療（個別化医療）のことです。病気の治療だけでなく、個々人が日々の生活で気をつけるべきことがわかり、病気の予防や健康の維持に役立てることもできます。この市民公開講座では、ゲノム医療の実際を、当事者の立場・がん医療・がん以外の疾患についてわかりやすく紹介すると共に、群馬大学の取り組みについて紹介します。

プログラム

14:00～14:05	開会挨拶 秦 健一郎 群馬大学 大学院医学系研究科 教授
14:05～14:45	遺伝子の検査をすることのメリット・知ることの意味 ▶ 大河原 和泉 日本レックリンブ・ハフセン 株式会社 To smile代表、日本レックリンブ・ハフセン 病学会 理事長補位 ▶ 平沢 晃 岡山大学学術研究医歯薬学域 教授、厚労省研究員 代表
14:50～15:20	ゲノム情報を知ることのがんの診断・予防・治療に役立てる ▶ 平沢 晃 岡山大学学術研究医歯薬学域 教授、厚労省研究員 代表 ▶ 秦 健一郎 群馬大学 大学院医学系研究科 教授
15:25～15:55	ゲノム医療に関する群馬県内の現状とこれからの群馬大学の取り組み ▶ 秦 健一郎 群馬大学 大学院医学系研究科 教授 大日方 英 群馬大学 大学院医学系研究科 准教授 小澤 厚志 群馬大学 大学院保健学系研究科 教授
15:55～16:00	閉会挨拶 秦 健一郎

共催 ● 厚生労働科学研究費補助金 がん対策推進総合研究事業「ゲノム情報に基いたがん予防にかかると期待される遺伝子検査に関する医療・社会体制の整備および国民の理解と参画に関する研究」班
● 群馬大学

後援 ● 群馬県 健康福祉部

お問い合わせ 群馬県ゲノム医療対策会議 県民公開講座 運営事務局 E-mail: gunma-genomu@congre.co.jp

資料1 パンフレット

保健学研究科

保健学学生・修了生主体による地域住民と協働した健康づくりの活動拠点形成

担当学科等 地域保健推進室

担当者 佐藤 由美 教授、他 12 名

●事業概要

保健学科学生、保健学研究科大学院生が主体となって、前橋市内の自治会単位で住民との協働により、子どもや高齢者の健康づくりとQOL向上のための活動拠点を形成する。保健学科で取り組んできた学生保健サポーターの養成と学生によるボランティア活動を基盤に、従来の地域活動への参加型から発展し、学生と住民が協働して健康づくりの活動拠点を作る。この活動に保健医療専門職である卒業生・修了生の参加を促し、質の高い活動を保証する。

●実施事業等

1) 学生保健サポーター養成

全8回（10/9－12/4）実施し、12名が受講した。前橋市職員、前橋市社協職員、国立赤城青少年交流の家職員、子ども食堂主催者、若宮地区自治会長を招聘し、講義・演習を実施した。またサポーター経験者が活動報告を行った。

2) 学生保健サポーターによる地域ボランティア活動の企画・実施

- ①前橋市若宮地区「群大保健学まちなか交流サロン」：9/22と3/19に学生主催・企画による高齢者サロンを開催した。地域住民が2回で延べ44名参加し、介護予防体操や手作業、脳トレなどを行い交流した（延べ学生10名、教員7名参加）。
- ②その他のボランティア活動：前橋市社会福祉協議会との連携により、子ども食堂こまがたつくし、下川淵子育てサロン、岩神地区ラジオ体操会、岩神地区カレー食堂、下小出地区ふれあいサロン、前橋市認知症を語るカフェ等に学生保健サポーターが参加し、企画や運営に学生が主体的に関わった。学生参加者数は延80名であった。

3) 大学院修了生ネットワーク交流会の開催

2/15に交流会を開催し、学部生を含む31名が参加した。修了生（看護学・生体情報検査科学・リハビリテーション学から各1名）が活動報告を行い、その後参加者で意見交換を実施した。

●本事業の成果

- ①参加住民の反応から、子どもとその保護者、高齢者等に対する保健福祉の充実、住民の社会参加や相互交流促進、孤立化防止及びQOL向上の場が提供できた。
- ②学生主体の取り組みにより、住民生活の理解や行政・団体、住民組織との連携・協働等に関する学生のearly exposureの場とすることができた。参加した学生の評価として、地域保健医療への関心の高まりとボランティア活動への意欲の高まりが確認できた。
- ③看護、検査、理学、作業の各専門性はもとより、分野横断的な協力により保健学研究科が少子超高齢社会に直面している地域への地域貢献事業として地域にアピールできた。特に岩神地区においては、地域の要望により群馬大学保健学研究科地域保健推進室の共催事業として手続きを行い、地域食堂の企画段階から大学（学生）が参画できた。

学生保健サポーター養成コース



学生保健サポーターの地域での活動



修了生ネットワーク交流会



医学系研究科・保健学研究科・医学部附属病院

群馬県軟式野球選手を対象にした

成長期スポーツ障害検診・群馬県高校野球投手メディカルチェック

担当学科等 整形外科学分野 リハビリテーション学 整形外科

担当者 田鹿 毅 教授

●事業概要

本事業は群馬県成長期軟式野球選手（小学生、中学生）、群馬県高校野球投手を対象とし、成長期スポーツ障害（野球肩、野球肘、腰椎分離症、オスグッドシュラッター病）の有無並びに、全身のコンディションを調査し、個々の体の状態に応じたトレーニング指導、医療機関の受診指導を行う。また野球指導者、保護者に対し検診結果をフィードバックするとともにスポーツ障害、その予防について啓発することである。成長期の骨組織の特徴として骨端線の存在が挙げられる。このためスポーツに伴う骨端線を含む外傷、障害を発症する危険性が高い。また成長期の筋組織、腱・靭帯組織などの軟部組織の特徴として、起始・停止を骨に置く筋腱複合体の長さは骨成長により決定されるため、骨と軟部組織の成長速度の違いが表れる二次性徴出現時に相対的に筋・腱・靭帯組織に牽引力が働き、過緊張に状態が上げられる。このため骨端軟骨層で骨端核が裂離する裂離骨折（内側型野球肘、上前腸骨棘、下前腸骨棘骨折等）やOsgood-Schlatter病に代表される骨端症などの障害が発症しやすい状況となる。本事業はこれら成長期特有の障害を早期に発見し早期治療を指導し、健全な体のコンディション並びにスポーツ環境整備作りの一助になることである。

●実施事業等

① 群馬県軟式野球連盟所属学童の部・少年の部

成長期スポーツ障害検診：2025年1月19日、群馬大学医学部刀城会館で行った。小学1年生から6年生までの野球選手計203名が参加した。検診は当科整形外科医師7名、野球連盟スタッフ2名、超音波貸与会社スタッフ1名、計10名体制で行われた。昨年に引き続き、今年度もコロナ、インフルエンザ感染予防対策（3密防止）のため、肘関節超音波検査；上腕骨小頭離断性骨軟骨炎（外側型野球肘）、上腕骨内側上顆裂離骨折の有無（内側型野球肘）の調査を行った。野球肘が疑われた選手は医療機関の受診指導を行った。また問診にて野球肩、腰椎分離症、オスグッドシュラッター病が疑われた選手に対しても、ストレッチ指導、医療機関受診指導を行った。

② 群馬県高校野球投手メディカルチェック

2025年2月2日、2月9日、2月16日の3日間、118名の高校野球投手に対し、肩関節、肘関節の超音波を用いたコンディションチェックを行った。選手のコンディションの結果は、選手、指導者にフィードバックされ、その結果をもとに、理学療法士による選手個別トレーニング指導を行った。

●本事業の成果

本年度行われた成長期スポーツ障害検診では、9名の選手が上腕骨小頭離断性骨軟骨炎（外側型野球肘）の発症を疑われた。後日9名の選手は、二次検診として当科外来、近医整形外科を受診していただき、レントゲン検査並びに診察を行い、保存加療開始もしくは経過観察となった。症候性上腕骨内側上顆裂離骨折（内側型野球肘）は6名認められた。医療機関への受診指導を行った。また腰椎分離症は1名に疑われたため、ストレッチ指導並びに医療機関への受診指導を行った。野球肘には内側型野球肘（リトルリーグ肘）と外側型野球肘（上腕骨離断性骨軟骨炎）に大別される。内側型野球肘は、骨折の一種であり、選手は受傷当初から有痛自覚症状を認めるため、選手による発症認識は可能である。しかし外側型野球肘の発症初期は自覚症状が乏しいため、選手による発症認識が困難である。超音波検査は、関節軟骨下骨の微小な病変を描出することができるため、外側型野球肘の早期診断に有用である。早期に発見された場合、低侵襲な保存加療にて治癒する可能性が高い。しかし病期が進行期以降で発見された場合、将来手術療法に移行する可能性が高い。このため超音波を用いた本検診は野球少年の投球障害の予防、啓発、早期発見の観点から、有意義と思われる。保護者、指導者、我々医療従事者が選手の健康を第一として、選手の健全なコンディションを構築、維持するために協力することが重要と思われる。また指導者、医療従事者は、選手からのコンディションについての情報を共有しやすい環境を構築するよう努めなければならない。本事業を通じて経年的に検診を行う事により成長期スポーツ障害を早期発見し、適切な治療対応へ導くことが期待できる。選手が楽しく、安全に野球が行えるよう、これからも務めていきたい。

● 実施風景

1. 成長期スポーツ障害検診

① 受付にて選手の体温チェック



② 身長、体重、体組成検査



③-1 超音波検査による野球肘検診



③-2 超音波検査による野球肘検診



③-3 超音波検査による野球肘検診



③-4 超音波検査による野球肘検診

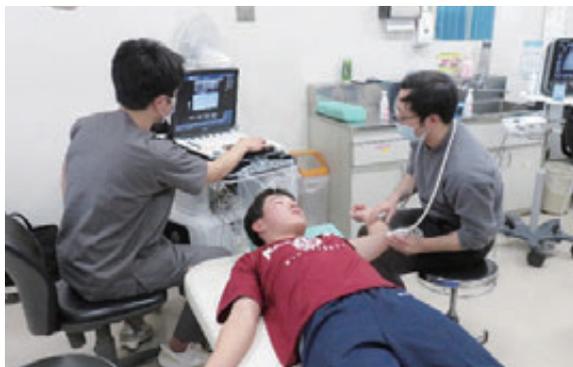


④ 保護者・野球指導者への野球肘検診結果説明



2. 群馬県高校野球投手メディカルチェック

① 超音波による肘関節内側側副靭帯検査



② 肩関節可動域検査



③ 選手・指導者へのメディカルチェック結果説明



④-1 理学療法士による個別トレーニング指導



④-2 理学療法士による個別トレーニング指導



保健学研究科

北関東精神保健看護研究会

担当学科等 精神看護学

担当者 近藤 浩子 教授・八木原 ひなた 助教

● 事業概要

北関東精神保健看護研究会は、精神保健看護に関する実践や教育等に関する情報交換と研究活動を通して、北関東の精神保健看護の向上に寄与することを目的として設立された。

実際の活動内容は、講師を招いた学習会、参加者が提供する事例の検討会などで、参加者相互のディスカッションを通して、情報交換と研鑽を行っている。

参加者への広報は、大学ホームページおよび精神科病院へのリーフレット配布によって行っている。参加者は、北関東（主に群馬県・栃木県）を中心とした北関東エリアにおいて精神保健看護に従事する専門職（精神科病院や訪問看護ステーションの看護師等）、大学教員・大学院生・学部生等で、毎回20～30名程度である。

研究会の開催頻度は年2～3回、令和6年度は、このうち2回を群馬大学において開催した。

- 1) 令和6年 7月 6日（土）：ミニシンポジウム&ワールドカフェ
- 2) 令和6年12月14日（土）：ミニシンポジウム&ワールドカフェ
(いずれも、会場は刀城会館)

● 実施事業等

1) 令和6年7月6日(土)【第28回研究会】 13:30-16:00

- ① プログラム前半(30分)：ミニシンポジウム「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」：群馬県内の精神科認定看護師3名が各々の実践を報告した。
- ② プログラム後半(1時間30分)：グループディスカッション『患者さんが地域で安心して暮らすための、これから』をテーマに、参加者全員が小グループに分かれ、ワールドカフェ形式で各自の考えを共有した。

2) 令和6年12月14日(土)【第29回研究会】 13:30-16:00

- ① プログラム前半(30分)：ミニシンポジウム：精神障害ピアサポーターの方を3名招き、お一人ずつ「リカバリーストーリー」を語っていただいた。
- ② プログラム後半(1時間30分)：『～今、現場でできること～ ピアサポーターのリカバリーストーリーを聞いて』をテーマに、精神科病院・精神科訪問看護ステーションで働く看護師6名をファシリテーターとして、ワールドカフェの形式で、語り合った。

● 本事業の成果

- 1) 県内外から約40名の看護師等が集い、意見交換を行った。ミニシンポジウムは、ZOOM配信も行った。群馬県内では精神科病院、クリニック、訪問看護ステーション、看護系大学など約20施設から参加者を得た。ディスカッションに参加した看護職は、地域精神保健看護の質の向上を目指す学習意欲の高い方々で、実践の課題やその改善策を活発に討議した。実践のモチベーションを相互に高め合う機会になったと高評価を得た。
- 2) 県内外から約30名が参加した。参加者は、精神科病院、クリニック、訪問看護ステーション、看護系大学に加え、本学の学部生も参加した。ZOOM配信のミニシンポジウムには遠方から3名が参加した。様々な立場から自由に意見交換し、参加者相互の繋がりが形成された。また群馬県精神障害者社会復帰協議会の協力を得て行ったピアサポーターの発表からは、当事者が障害を抱えながら地域で自分らしく生活するために、看護に求められることを学び、看護者側も活力を養う機会になった。

● 実施風景



担当学科等 分子化学部門、知能機械創製部門

担当者 奥津 哲夫 教授・鈴木 良祐 准教授

●事業概要

子供の理科離れが叫ばれて久しい。子供のころに科学的に興味深い体験をすることが少ないことがその一因と考えられている。そこで、子供とその教育にかかわる保護者に、チョコレートのテンパリングについて親子で楽しみながら学べる科学体験を提供する。

大人から子供まで多くの人々を魅了するチョコレートはココアバター結晶構造によって味が変化する菓子である。15～50℃の範囲の温度調整（テンパリング）だけで、その結晶構造を変化させ、舌触り、歯ごたえ、甘さ、口溶けを変えることができる。

本事業では、科学的に美味しくなるテンパリングをチョコレートに施し、正しいテンパリングをしていないチョコレートと食べ比べることで、テンパリングによるチョコレートの美味しさの違いを体験する。これにより、物質の特性の変化に物理や化学が関連することを実感させ、理科（科学）の重要性を子供とその保護者に根付かせるとともに科学に関する興味関心を引き出す。

●実施事業等

理工学部庶務係広報担当と連携し、参加者を群馬大学HP、桐生市HP、ふれあいメールおよびSNS上で募集した。プレスリリースも行い、桐生タイムスに募集広告が掲載された（参考URL（1））。

2024年12月7日（土）9：30～11：30に第7回こども科学体験教室～チョコレートを科学する！～をハイブリッドで実施した。オンサイトは群馬大学桐生キャンパス8S棟3階実験室を会場とし、オンラインはZoomミーティングルームを会場とした。

オンサイトは17組（募集最大20組）、オンライン5組（募集最大20組）の参加があった。小学1年生から一般まで、幅広い年齢層からの参加申し込みがあった。

本事業では、チョコレートのテンパリングに関して口頭で説明を行ったのち、実際にチョコレートのテンパリング実験を行い、テンパリングをしたチョコレートと、していないチョコレートを試食した。参加者からは、「甘さが全然違う」、「舌触りが違う」といった意見があり、ほとんどの参加者は、テンパリングによるチョコレートの組織変化と味や舌触りの変化を体験することができた。図1および図2は実験後の記念撮影をした写真である。参加者は皆笑顔であり、子供も大人も楽しみながら学ぶことができた。

●本事業の成果

本事業により、チョコレートのテンパリングの科学実験を通じて、子供と大人に科学の重要性や興味深さを認識させることができた。

チョコレートのテンパリングは安全かつ簡単な実験であるが、いくつかポイントがあり、集中して行わないと失敗する。（参考URL（3））の記事の写真からも、参加者が真剣に作業に取り組んでいたことが分かる。

テンパリングによる味と舌触りの変化は比較的分かりやすい。集中して真剣に作業に取り組み、苦労して得たチョコレートは、テンパリングなしのチョコレートより美味しい。参加者は努力したその場で達成感を味わうことができた。これにより、努力することの大切さや楽しさを認識させることができ、自ら学ぶ土壌づくりに貢献できた。

親が子供とコミュニケーションを取り、挑戦する子供を適切に支援することは、子供を優秀に育成するのに効果的であるとされている。一方、大人は、時間があるといスマートフォンを見てしまいがちである。本イベントでは親子のコミュニケーションにとって良質な場を提供できた。すぐに成長してしまう子供に向き合うことの大切さを保護者に再認識してもらうことができた。保護者の親力を向上させ、将来の優秀な理系人材の育成につながる場（家庭）の構築にも貢献できた。

●実施風景



図1 イベントの最後に対面参加者と記念撮影



図2 イベントの最後にオンライン参加者と記念撮影

新聞に掲載された関連記事 参考 URL

- (1) 11/19 「群大桐生キャンパスで来月7日に科学体験教室 あすまで募集」
: <https://kiryutimes.jp/article/k08-wTZm/>
- (2) 12/12 ぞうき林「科学の実験」
: <https://kiryutimes.jp/article/EhhcpsJV/>
- (3) 12/12 「科学でおいしいチョコ作りに挑む 群大桐生キャンパスで体験教室」
: <https://kiryutimes.jp/article/5uxkeLrB/>

生体調節研究所

‘24 summer オープンラボ student programme

担当者 佐々木 伸雄 教授

● 事業概要

本事業は生体調節研究所主催の高校生を対象としたオープンラボである。今年度はSSH指定校（スーパーサイエンスハイスクール）である群馬県立前橋女子高等学校の生徒を対象に夏休み期間中に研究室を開放して講義に加え実際に実験実習を体験してもらうプログラムとした。各コースとも少人数の受入れにより、きめ細やかな実験のサポート体制が整い、研究の現場の深層部まで知ることができる積極的参加型のプログラムとなっている。さらに、研究者が日ごろから使用している最先端の実験機器や解析機器等に触れ、実際に手を動かし実験を行う非日常的な経験は研究活動の一端に触れることになり、高校生にとって今後の知的探求心の追求や生命医科学分野の進路選択へのアプローチにも繋がると推察する。本事業を通じて、本学の使命でもある社会貢献を果たし、研究成果の還元やグローバルな視点を持つ若い人材の育成にも寄与できると考えられる。

● 実施事業等

8月7日（水）にAコース、8月20日（火）にBコースの2コースを実施した。Aコースは生体膜機能分野の担当で、線虫*C.elegans*を使用した実験実習を行った。実体顕微鏡や共焦点レーザー顕微鏡で線虫を観察してもらい、異なる顕微鏡での線虫の見え方の違いや生きた線虫内でGFP（緑色蛍光タンパク質）が光る様子を体感してもらった。また、線虫の嗅覚を調べる走化性実験では、調味料やアミノ酸飲料など身近な液体を準備し、どの液体に対して線虫が嗜好性を示すかを観察した上で、その結果をグループごとに考証し発表してもらう発表形式のプログラムとなった。Bコースはゲノム科学リソース分野の担当で、マウスの精子、卵子を使い体外受精の手法を体験してもらった。顕微鏡下でマウスから精子と卵子を取出して観察をし、その後、培養液内で体外受精を行い、受精後の卵子の変化を観察してもらった。さらに受精卵に遺伝子を導入する装置を見学してもらい、樹立されたゲノム編集マウス（GFPマウス）の観察を行った。

● 本事業の成果

本研究所は基礎研究と臨床研究の両翼を担っており、細胞レベルでの病態解明やゲノム解析、腸内細菌、糖尿病やがん研究など、様々な研究分野にて成り立っている。短時間ではあるが、オープンラボの参加により実際の研究現場を体験し研究領域の広さを理解してもらうことで、高校生の理系進路選択の一助になる役割を果たすと考える。

次世代の日本の科学研究を担う高校生が大学進学前にこのような能動的なプログラムに参加することにより、今後の学習意欲や進学意識の向上、科学への探求心を深めるなど「知の循環」が期待され、日本の科学力向上に繋がるものと推察する。アンケート調査でも高評価を得ており、高校側からも継続実施を要望されているので、ブラッシュアップした企画にて事業を継続する方向である。

「'24 summer オープンラボ student programme」

【Aコース】令和6年8月7日(水)
9:30~12:15

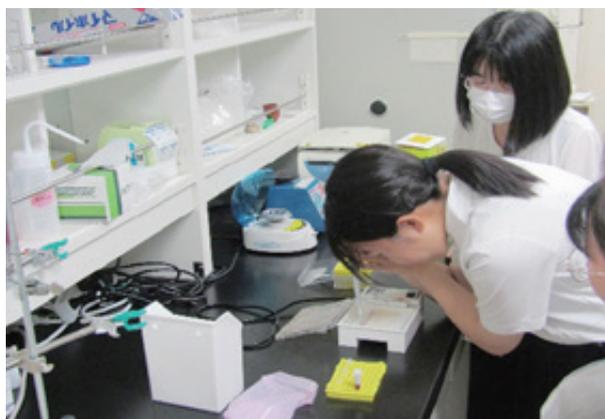


顕微鏡で線虫を観察

【Bコース】令和6年8月20日(火)
10:00~13:00



体外受精とゲノム編集についての講義



PCR後のサンプルを電気泳動する様子



培養液内で体外受精を行う実験の説明



線虫の嗅覚を調べる走化性実験の結果について考証中



体外受精後の卵子の変化を観察

生体調節研究所・重粒子線医学研究センター

高校生のための最先端生命科学&重粒子線医学セミナー

担当者 生体調節研究所 佐々木 伸雄 教授・重粒子線医学研究センター 大野 達也 センター長

●事業概要

本事業は生体調節研究所と重粒子線医学研究センターの連携により基礎研究及び臨床医学の最先端領域を幅広く体験できるセミナーである。今年度はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校の群馬県立前橋女子高等学校から生徒20名程度を本学に招き、生体調節研究所における生命科学研究についての解説と実験室見学、並びに重粒子線医学研究センターの治療施設見学と最前線治療についての講義を予定している。さらに、研究者がそれぞれの体験談やキャリアパスについて講義をする。

これらの体験学習は進路選択を控えた高校生が理系分野を具体的に将来の進路の候補として捉えてもらうための貴重な機会を提供するものである。

●実施事業等

2025年3月8日（土）に群馬県立前橋女子高等学校の生徒18名が参加した。

2班編成にて以下の内容を交互に見学していただくスタイルとし、短時間でも効率よく実験室や治療施設を体験できるよう工夫をした。

1. 実験施設見学（生体調節研究所・細胞構造分野）
2. 治療施設見学（重粒子線医学センター シミュレーション室 等）

「研究者としての生き方・学び方」として、2名の若手研究者が職業としての研究職について講義を行った。

1. 生体調節研究所・細胞構造分野 前島 郁子 助教
2. 重粒子線医学研究センター 吉田 由香里 助教

※当初予定していた重粒子線医学研究センターの吉田 由香里 助教の講義は都合により急遽中止となったが、タイムスケジュールの調整や見学時間を増やすなど柔軟な対応をとったので、運営は問題なかった。

●本事業の成果

県内のSSH指定校を中心とする高校の生徒に向けて本学の特色である最先端の生命医科学や重粒子線医学の現場を公開し、研究に従事する大学教員から直接話を聞ける場も設け、先端技術と研究内容を分かりやすく解説した。

さらに研究者の体験やキャリアパスについてアドバイスも交えた講義は生命医科学分野を具体的に将来の進路の候補として捉えてもらうための貴重な機会となった。学部横断型の内容により高校生からは例年にも増して多数の質問が寄せられ、生徒自身が能動的に参加し、そのうえで研究の深層部を追求する姿勢が随所に見られた。本事業は「知の拠点」として本学の活動を広く知っていただき地域社会へ還元するだけでなく、グローバルな視点で活躍できる新たな若い人材の育成にも繋がる大変意義がある活動であると考えている。また、高校生の学習意欲や進学意識の向上も期待され、高大接続の模範にもなる地域貢献活動として今後も長く継続する方向である。

令和6年度 群馬大学地域貢献事業
「高校生のための最先端生命科学&重粒子線医学セミナー」
令和7年3月8日(土) 10:00~12:30



開会式の挨拶
(左：藤谷所長、右：大野センター長)



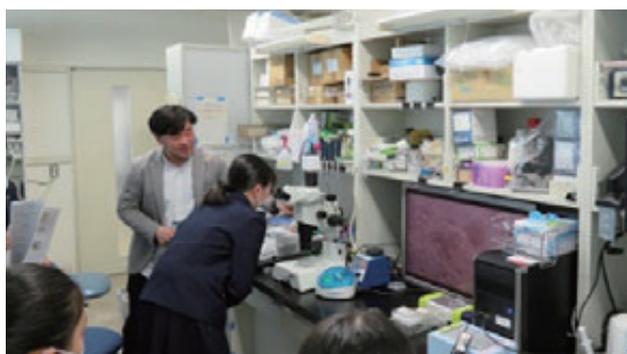
閉会式の挨拶
(左：稲垣副所長、右：司会進行の佐々木教授)



【研究者としての生き方・学び方】の講義



実験室で線虫について説明



顕微鏡で卵子と精子を観察



加速装置の説明



治療室で照射方法の説明



活発な質疑応答

ウクライナ DAY in 群馬大学

担当者 西村 淑子 総合情報メディアセンター長・飯島 睦美 グローバルイニシアチブセンター長

●事業概要

ロシアの侵攻により平穏な生活が奪われ、群馬県内に避難しているウクライナの人々から直接生の声を聞き、イベントを通じて彼女らと交流することにより、現地の状況や歴史・文化の理解を深めるためのイベントを実施した。群馬大学で受け入れているウクライナ出身の学生・研究者、外部講師による講演会、在日避難民によるトークイベント、ウクライナ文化を理解するためのワークショップ及び「発行されなかった卒業証書展」を開催した。本事業を通じて、ウクライナへの理解を深め、平和の重要性を考える機会を提供するとともに、群馬大学基金など、ウクライナ支援に係る事業紹介をした。

なお、イベント当日の運営スタッフとして学生7名を採用し、国際問題や多文化交流を実体験として学ぶ機会を提供した。

●実施事業等

8月25日（日）13：00～16：00に以下のイベントを実施した。

1. トークイベント「避難民が語るウクライナと日本」
：本学学生、研究員を含むウクライナからの避難民4名に母国の様子や日本での生活について生の声を聞く。
2. 講演「ポーランドから見るウクライナ支援の現状」
：ポーランドからウクライナの子供達へ支援を続ける坂本龍太郎氏によるオンライン講演会。
3. ウクライナの子供もたちが描いた絵の展示（坂本氏の活動支援団体「ウクライナの子供達を支える会」から30点借用）
4. ウクライナから避難する本学学生、研究員が講師となってウクライナ文化の体験型ワークショップを実施
①お守り人形「モタンカ」作り②ペトリキウカ塗りの技法を使ったペインティング。
5. 展示「発行されなかった卒業証書展」
：ロシア侵攻により亡くなったウクライナの学生を紹介するパネル展示。コンテンツはウクライナのプロジェクトチームUnissued Diplomas提供。

●本事業の成果

1. 地域の理解と関心の向上：群馬県内に避難するウクライナの方々的心声を直接聞くことで、地域住民や大学関係者はウクライナ問題をより身近に感じられるようになり、今後の支援活動や意識喚起につながる基盤が形成された。当日参加者から総額20,100円の寄付が寄せられ、坂本氏の活動支援団体へ送金した。
2. 文化交流と多文化共生の推進：文化体験ワークショップや子供たちの絵画展を通して、参加者はウクライナの豊かな文化を体験し、多文化理解が促進された。
3. 避難民への心理的支援：祖国を離れ日本で不安な避難生活を送るウクライナの方々に、受入大学や地域が心を寄せ、ウクライナの現状や豊かな文化について知ろうとする姿を見せることで、避難民の方々へ、地域に受け入れられ支援者が身近にいるという安心感を与えることができた。

ウクライナ DAY in 群馬大学

2024年8月25日(日)

1. トークイベント：避難民が語るウクライナと日本



2. 坂本龍太郎氏オンライン講演「ポーランドから見るウクライナ支援の現状」



3. ウクライナの子どもたちの絵画展



● 実施風景

4. ワークショップ



①お守り人形「モタンカ」作り



②ペトリキウカ塗りの技法を使った
ペインティング

5. 展示「発行されなかった卒業証書展」 Unissued Diplomas





■ information

群馬大学地域連携推進室

前橋市荒牧町四丁目2番地 群馬大学事務局内

tel 027-220-7544 (直通)

fax 027-220-7515

E-mail : tiikir-s@ml.gunma-u.ac.jp

URL : <http://www.gunma-u.ac.jp/research/res003/g1948>



*表紙ロゴマーク
 「国立大学法人群馬大学ロゴマーク」
 平成18年4月制定
 群馬大学の英文頭文字『G』をモチーフに緑と青で豊かな自然環境を示し、学生の成長と活躍をイメージして、新しい未来の創造と社会へ貢献する大学の存在感を表現しています。